ボードレールの宗教観

浅岡 夢二

I はじめに ―ボードレールの本質―

ボードレールは、本質的にきわめて宗教的な詩人であった。そのことは、たとえば、「赤裸の心 ３１」にある、

地上で興味あるものは宗教しかない。(1)

という断言を見るだけでも充分に納得することができるだろう。
ボードレールは、また、きわめて神秘的かつ霊的な詩人であった。そのことは、「赤裸の心 ４５」に見られる次の言葉から伺うことができる。

子供の頃からの神秘に対する私の愛好。私が神とかわした対話。(2)

ボードレールという、自己の良心に対する苛烈な糾弾を一生行ない続けた批評家、そして誰よりも厳密な言葉遣いを心がけた詩人が、「私が神とかわした対話」と言っていることに注目しよう。つまり、これは文字通りの言葉と取ってよいのである。
このことに関しては、ポール・ブールジェが、『現代心理論集』の中でまさしく次のように言っている。

（この）魂は、神を見ていたのだ。神はこの魂にとっては、言葉でもなく、象徴でもなく、抽象でもなかった。それは、あたかもわれわれがわれわれを愛し、知り、理解する父と一緒に暮らすように、魂がもろともに暮らすところのある存在であった。(3)

ボードレールが、宗教的かつ霊的な詩人であったことは、さらに、「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という疑問を探求し続けたゴーギャンとともに、次の疑問を探求し続けたことからもわかるだろう。

私たちの死んだ友人たちはどこにいるのか。
私たちはどこから来たのか。
自由とは何なのか。
自由は摂理の法則と調和し得るか。
霊魂の数は有限なのか無限なのか。
また生存可能の天体の数は？
等々……。(4)

ここで、ボードレールが「死後の世界」や「生前の世界」のことに触れるのと同時

に、「自由の問題」また「自由と摂理の関係」について問いを発しているのは偶然ではない。というのも、「自由の問題」も「自由と摂理の問題」も、「死後の世界」や「生前の世界」の問題が解明されない限り、ついに解明されることはないからである。

また、ボードレールが、「霊魂」の存在を当然のこととして、その上で、その「数は有限なのか無限なのか」と問うていることも興味深い。ボードレールにとって、「霊魂」の存在は、明々白々の事実であったのだ。ボードレールの作品を読む者は、いたるところで、「魂」という言葉に出くわすだろう。それは、文字通り、枚挙にいとまがないほどである。そして、それらのすべての場合において、ボードレールは「魂」という言葉を、単なる文学的な比喩としてではなく、字義通りの実体を持つ言葉として使っている。

II　ボードレールの宗教観の諸相

（1）サタン

ボードレールは神を信じる一方で、当然のことながら、サタンの存在も信じていた。いや、信じていたというよりも、むしろ、サタンの存在を「身近に感じていた」、と言った方がよいかもしれない。

神とサタンに関しては、あまりにも有名な断片が「赤裸の心　１１」にある。以下にそれを引用してみよう。

> どんな人間にも、どんな時にも、二つの祈願が同時にあって、一つは神に向かい、一つはサタンに向かう。神への祈願、あるいは精神性は、向上への希求である。サタンへの祈願、あるいは動物性は、下降への悦びである。女への愛や、動物、犬や猫などと親しむのは後者に属する。
>
> この二つの愛から生ずる悦びは、この二つの愛の性質にそれぞれ相応している。（5）

ボードレールは絶えず神に憧れながら、同時に、もう一方で、サタン（または悪霊）に惹かれていたのである。

では、サタンとはそもそもどんな存在なのだろうか？　ダンディスムとカトリシスムを二つの焦点として、ボードレールの楕円形の肖像を見事に描いている齋藤磯雄著『ボオドレエル研究』からサタンに関する説明を引用してみよう。

> サタンの起源に関しては明確な典拠を欠くが、神によって創造せられし人間以上の霊的存在が神に対して反逆の立場に立つに至ったもの、と見る解釈が広く行われている。注目すべきはその職能である。直接神に敵し神を滅ぼすことはサタンと雖も不可能であるが、エバやヨブの場合に見らるる、神の黙認もしくは允許の下に、死力を尽くして神の子等に対して敵対する。従ってサタンの最大目標は神と人間の間に介入して両者を離間し、極力人間が神に近づくのを妨げることに在

る。この目的のためにサタンの用いる手段は、誘惑、強制、迫害、懐柔、欺瞞、等々、一として尽さざるはない。その奸策の端倪すべからざること実に《己を光の御使に扮う》に至るのである。（6）

かくの如きがサタンなる存在であるが、ボードレールにとって、サタンは単なる抽象でも理論でもなく、現実の存在として絶えずボードレールに働きかけていたのである。

サタンは主として、我々の「欲望」をそそり、「倦怠」につけこむことによって神から我々を遠ざけ、そして我々を支配しようとする。そのことを、見事に語って間然するところのないのが、『悪の華』（再版）１１９の「破滅」であろう。

絶えず僕の傍らを「悪魔」の奴がうごめいて、
眼にもとまらぬ空気のように僕をめぐって泳ぎまわる。
奴をぐっと呑み込むと、僕の肺は焼けつくようで、
永遠の罪つくりな欲望が中を一杯にしてしまう。

時折奴は、僕が「芸術」に目のないことを知り、
何とも魅惑的な女の姿に化けてみせる、
猫をかぶったもっともらしい口実をつけ、
僕の　唇（くちびる）　を不潔な媚薬に慣らしてしまう。

こうして奴は僕を導く、神の眼の届かぬところへ、
喘ぎ行く僕、息も絶え絶えの僕を駆って、
荒涼として涯（はて）しらぬ「倦怠」の曠野の奥へ、

そして、混乱に満ちた僕の眼の中に、
奴は投げ込む、汚れた着物、口を開いた傷口、
また「破滅」の血まみれの武器までを！（7）

あるいは、『悪の華』（再版）の冒頭に掲げられた「読者」においても、意志を潰えさせて我々を怠惰に導き、そして欲望へと駆り立てる悪魔の手法が、実に鮮やかに描写されている。

悪の枕に陣取るは、「大悪魔トリスメジスト」、
魅了された僕等の心をいつまでも眠りに揺すり、
また僕等が意志と名づける貴金属も、
玄妙のこの化学者の手にかかればすべて蒸発。

彼等を動かす糸を引くもの、これこそ「悪魔」！

怖気をふるう品々にあやしい魅力を見つけ出す、
毎日僕等は堕ちて行く、「地獄」の方へ片足ずつ、
恐れも知らず、悪臭放つ暗黒の闇を渡って。（8）

ボードレールはまた、悪魔がどのようにして自分を支配するかを、１８５８年２月１９日付けの母宛て書簡において次のように詳しく語っている。

この悩みに、次の悩みを加えてみてください、これは、理解していただけないかもしれませんが――ある男の神経が、無数の不安と苦悩のせいでひどく弱っている時、悪魔が、ありとあらゆる決意を押し切って、毎朝、次のような考えをとってこの男の頭脳にしのびこむのです――まる一日何もかも忘れて休むことが、どうしていけないだろう。夜になったら、それこそ一息に、急ぎの用事は全部かたづけてしまえばよい。――それで夜になってみると、精神はとどこおっている事どもの数多いのにおびえてしまう。圧倒的な悲哀が無力をもたらし、そして翌日また、おなじ芝居が、おなじ自信とおなじ良心をもって、本気で演じられるというわけです。（9）

ここで注目すべきなのは、「ある男の神経が、無数の不安と苦悩のせいでひどく弱っている時」に悪魔がこの男の心の中に忍び込む、と書いていることであろう。

というのも、悪魔はいついかなる時でも、我々の心に忍び込めるわけではなく、我々の心に悪魔の心と同通する部分ができた時にのみ、そこを足がかりとして我々の心に入り込めるからである。ボードレールはそのことをはっきりと見抜いていた。もし、悪魔が常に我々の心を支配できるとすれば、この世はたちまち地獄と化してしまうことになる。

さらに、ボードレールがどれほど本気で悪魔の実在を信じていたかを示す書簡が別にある。１８６０年にボードレールは『人工の天国』をフローベールに贈ったのだが、それに対する礼状の中で、フローベールは、ボードレールが「悪霊」についてあまりにも熱を込めて語っていることに対し、疑義を呈したのである。すると、その礼状に対する返信の中で、ボードレールは次のように語った。

以前からずっと、人間のある種の突然な行為や思考は、人間の外にある意地悪い何かの力の介入することを仮定せずには私にはどうしても説明がつかないという考えに、つきまとわれてきたのに気付きました。これはとてつもない告白ですが、この十九世紀全体がぐるになって向かってこようと、赤面などしないつもりです。（１０）

「人間の外にある意地悪い何かの力」こそが、「悪霊」や「悪魔」と呼ばれている存在なのである。

さて、「欲望」や「倦怠」のほかに悪魔が好んでターゲットにするのが「慢心」や「驕慢」である。ボードレールはみずからがダンディであることを強調する時、しばしば「慢心」や「驕慢」に陥った。したがって、そのような時には、悪魔の手に落ち

ていた可能性が充分にあるだろう。
　１８６０年１０月１１日付けの母宛て書簡では、みずからの「倨傲の心」について次のように言っている。

　万事言ってしまわなければなりませんが、僕には、僕を支えている倨傲の心があり、すべての人間に対する荒々しい憎悪があります。いつも僕は、人間たちの頭上に立つ者でありたい、復讐したい、何の罰もこうむらずに無礼を働ける身になりたい、その他さまざまの子どもっぽいねがいをいだいているのです。
（中略）
　不幸になればなるほど、僕の倨傲の心は強くなる――（１１）

「権力欲」、「復讐心」そして「無礼な態度」のみならず、「悪意」や「憎悪」もまた悪魔の好むターゲットである。晩年になると、極端な生活の不如意も手伝って、ボードレールは数々の「悪意」に満ちた言葉や罵詈雑言を、「火箭」「赤裸の心」また「哀れなベルギイ」などに書き連ねている。特に「哀れなベルギイ」に至っては、もう「憎悪」の垂れ流しとしか言いようのない惨状である。こうした時期には、かなり長い期間にわたって、悪魔に支配されていた可能性があると見てよいだろう。
　とはいえ、ボードレールは、悪魔の最も巧妙な罠さえ見抜くことができた、ということは言っておかなければならない。すなわち、

　悪魔の最も巧妙な策略は、悪魔は存在しないと諸氏をして信ぜしめるところにある（１２）

ということを、ボードレールは、その炯眼をもって見抜いていたのである。
　ところで、ボードレールは、１８６１年１２月２３日付けの哲学詩人ヴィクトル・ド・ラプラド宛の書簡の中で、自分は熱烈なカトリック教徒であると主張し、また、悪魔とカトリックとの結びつきも強調している。

　私はいつも熱烈なカトリック教徒であった、これは、あなたと私の間に、律動（リズム）と脚韻の縁（えにし）を数えるまでもなく、ひとつの縁をつくり出すものである、と。これを聞いて友人シュナヴァールはどっと吹き出したと、白状しておかなければなりません。この哲学者、この精緻な推論家は、『悪の華』のなかにカトリック教徒をかつてかぎつけたことがなかったのです。しかしながら、この作品が悪魔的であると仮定しても、悪魔よりもカトリック的な何物かがはたして存在するか、と言えはしないでしょうか？（１３）

　もちろん、ボードレールは基本的にはカトリック教徒であったし、『悪の華』はカトリック的な要素の非常に強い詩集である。そして、カトリックの教義の中心には悪魔の存在がある。
　とはいえ、悪魔はカトリックという宗教にのみ特有のものではない。仏教にも、イ

スラム教にも、悪魔は存在するし、世界中の数多くの宗教にも悪魔が登場する。したがって、悪魔こそが最もカトリック的な存在であるとは言えないのである。

また、ボードレールは、「いつも熱烈なカトリック教徒であった」わけではない。青年期にはずいぶん長いあいだ神から離れていたし、神に叛逆することも何度かあった。それに、そもそもボードレールの宗教意識自体が、カトリックの枠の中に納まりきるものではなかったのである。この点に関しては、これから徐々に見ていくことにしよう。

（２）天国と地獄

ボードレールは、当然のことながら、天国も地獄も信じていた。そして、『悪の華』を全体として見た場合、そこには、天国（的な情景）よりも地獄（的な情景）の方がたくさん描かれている。

しかしながら、ごくたまに見られる天国的な情景は、この上もなく美しい。たとえば、「６２　悲シクテサマヨイノ」と題された詩には、天国が次のように歌われている。

語れアガトよ、時に飛び去るか、お前の心は、
汚わしい大都会、この黒い大洋をはるかに越え、
壮麗は輝きわたり、処女性のように、色は
青く明るく澄んで深い、別の大洋へ、
語れアガトよ、時に飛び去るか、お前の心は？

（中略）

かぐわしい天国よ、ああ遠いものは如何になつかしく、
そこに、明るい青空のもと、すべてはただ愛と悦び、
そこに、すべて人の愛するものは愛されるにふさわしく、
そこに、無垢の悦楽にひたる心は愛にほころび！
かぐわしい天国よ、ああ遠いものは如何になつかしく！

しかしおさない恋のみどりの天国は、
駈けっこは、歌声は、くちづけは、花束は、
丘の蔭に顫えているヴィオロンの旋律は、
夕べ、林の中で汲まれる葡萄酒の味は、
――しかしおさない恋のみどりの天国は、

人目を忍ぶ悦びに充ちていた純情の天国は、
今はインドよりもシナよりももう遠いのではあるまいか？
ああ悲しい叫びをあげて遠い日を呼び返すことは、
銀の声でそれを生きかえらせることは出来ないか、
人目を忍ぶ悦びに充ちていた純情の天国は？（１４）

あるいは、

そこにすべては整いと美と
栄華と悦楽と静けさと。（１５）

というルフランを伴った「５３　旅への誘い」という詩もまた、天国的な情景を描いたものだと言えるだろう。
それに対して、地獄、または地獄的な情景を描いた詩はいくらでもあげることができる。そもそも、『悪の華』の冒頭に置かれた「読者に」という詩自体が、「倦怠」の支配する地獄を描いたものなのである。

僕等を動かす糸を引くもの、これこそ「悪魔」！
怖気をふるう品々にあやしい魅力を見つけ出す、
毎日僕等は堕ちて行く、「地獄」の方へ片足ずつ、
恐れも知らず、悪臭放つ暗黒の闇を渡って。

（中略）

ひしめき群がり、幾千の蛔虫をさながらに、
僕等の頭脳のその中で、「悪霊」の群は大酒盛り、

（中略）

しかし金狼に、豹に、山犬に、
猿に、蠍に、禿鷹に、毒蛇と、
吠え、喚き、唸り、這いずる怪物どもの住む、
僕等の悪徳のこの忌まわしい野獣の苑にあって、

更に醜く、更に卑劣、真に唾棄すべき獣は！
動きもひっそり、大声もあげないが、
美しい大地を我と自ら廃墟と化し、
大あくび一つに世界を飲み込む奴は、

これぞ「倦怠」！（後略）（１６）

また、「１５　地獄のドン・ジュアン」という詩は、まさに文字通り地獄に落ちたドン・ジュアンを描いている。
あるいは、「１６　傲慢の罰」という詩に出てくる「博士」は、「悪魔の傲慢に取り憑かれて」生き地獄をさ迷うことになる。

その時以来、この博士、まるで町をうろつく犬猫で、
何も見えず、野を越えて、冬と夏との、
区別もつかず、さ迷い歩いていくばかり、
役立たずの品物どうぜん、きたなく、無益で、醜くて、
今では小さな餓鬼どもの、弄びもの、笑いもの。（１７）

さらに、「３０　深淵ヨリ叫ビヌ」という詩には、地獄の底から「神」に呼びかける男の姿が描かれている。

愛するただ一人の「者」よ、この心の沈みはてた、暗い、
深淵の底から、ただ 汝（なんじ） の憐れみを願う。
そこは鈍色の地平のめぐる暗愁の世界、
夜の中を恐怖と冒瀆とはうごめきあう。

（中略）

氷のような太陽の冷たい無情と
遠い世の「混沌」にも似た無限の夜と、
ああこれにまさる恐怖が一体どこにあろう。（１８）

あるいは、「７８　憂愁」という詩に描かれた次の陰鬱極まりない光景はどうであろうか？

低く垂れた空は蓋（ふた）のように重くかかり、
日々の倦怠に嘆く心を押し殺す、
その時、空は地平のまるい輪を限（かぎ）り、
夜よりも悲しい暗い昼（ひる）をそそぎかける。

その時、地上湿った土牢と変り、
はかない「希望」は蝙蝠にたとえられる、
怯えた翼は粗壁（あらかべ）にはねかえり、
くさった天上に頭を打って悶え去る。

その時、雨は小止みなく糸を引きながら、
広い牢獄の鉄格子を思わせる、

忌わしい蜘蛛の一族、唖（おし）のやから、
僕等の頭脳の奥に網を打ちに来る。

鐘は鳴る、その時不意に、狂ったように、
陰惨な唸り声を大空に投げつける、
ふるさと知らぬさすらいの亡霊のように
いつまでも執念（しゅうね）く声は呻いている。

――そして鼓（つづみ）も楽（がく）もない柩車の長い列は、
しずしずと僕の魂を通りすぎる。「希望」は
敗れて啜り泣き、凶暴な、我がもの顔の「苦悩」は
僕の俯した頭蓋に黒い旗を打ちたてる。（１９）

一方、小散文詩集『パリの憂愁』にも地獄は描かれている。たとえば、「６　人はみな幻想（シメール）を」に描かれている「荒寥寂漠」とした光景は、まさしく地獄と呼びうるものではないだろうか。

大きな空は鉛色に垂れ、道もなく、芝草もなく、薊（あざみ）も蕁麻（いらくさ）も生えていない埃だらけの大平原の中を、首うなだれて歩いて行く多くの人々に出会った。

行人の一人一人は、背中に巨大な噴火獣（シメール）を載せていたが、その重量たるや小麦袋か石炭袋に、或はまたローマ歩兵の軍装にも比較されるほどだった。

が、載せたといっても、この奇怪な獣は決して血肉の通わぬ死んだ荷物ではなかった。反対に、弾力性のある強靭なその筋肉で、人々の肩を覆いそれをぐいと締めつけていた。巨大な二つの爪が、乗物の胸に鎹（かすがい）のように喰い込んでいる。そしてこの伝説獣の獅子頭は、古代の戦士が敵手の恐怖をいやが上にも増そうとしてかぶった、あの恐ろしい軍兜にも似て、人々の額の上に慄然と据わっていた　。（２０）

さて、これほどまでに凄まじい地獄の光景を描き出したボードレールは、地獄に関しては正統的なカトリックの立場を取っている。すなわち、ひとたび地獄に落ちたものは、永遠にそこから抜け出すことができない、と考えるのである。それをあまりにも強く信じていたためだろうか、ボードレールはジョルジュ・サンドに関して、実に奇妙な「誤読」をしている。「赤裸の心　１６」の中で彼は次のように言っているのである。

『マドモアゼル・ラ・カンティニィ』の序文を見るがいい。この序文で彼女は、真のキリスト教徒は地獄の存在を信じないと主張している。彼女サンドは、「善良な人々の神様」、門番やいかさま女中の神の味方なのだ。彼女が地獄を抹殺したがるのも、もっともなことだ。（２１）

ここでボードレールは、サンドが「地獄の存在を信じないと主張している」と言っている。ところが、サンドは、実際にはそのような主張はしていないのである。齋藤磯雄訳の『火箭・赤裸の心』の「赤裸の心註解」に件の序文が訳されているので、それをここに引用してみよう。

そもそも教会が我々に悪魔の存在や地獄の永劫の責苦を信ずべしと命じる場合、我々は、神の御霊が教会にありや否やを疑わしく思います。永遠に生き、永遠に邪悪であり、永遠に強力な、神の宿敵、――全世界のありとあらゆる罪ある魂が、神が赦罪を欲し給わずもしくは与え得ざるままに、名状し難い責苦を永遠に受ける、底知れぬ深淵の所有者であり絶対君主である者の、必要を信じること、このような言語道断な信仰を是非とも有たなければならぬものでしょうか。今までのところ基督教会は然りと言って来ました。……

自らカトリック教徒と名乗る有徳の士は、オクタヴ・フイエ氏を初めとして、この永劫の責苦という教義を否定することを我々は固く信じます。聖列に加わった多くの信者がこのような教義に反対していますし、この教義はすべての善良な基督教徒に対して真の恐怖を抱かせます。（２２）

ここに見られるように、サンドは、「地獄の存在を信じないと主張している」のではなく、「地獄の永劫の責苦」を信じない、と主張しているに過ぎない。また、「永遠に生き、永遠に邪悪であり、永遠に強力な、神の宿敵」である悪魔の存在を信じない、と言っているのである。さらに、「罪ある魂」が地獄に落ちて、「名状し難い責苦を永遠に受ける」ことを信じることができない、と言っているのであって、「地獄は存在しない」と言っているわけではない。さらに、地獄に落ちた魂に対し、神が永遠に赦罪を与えないはずはない、と主張しているのである。

実は、伝統的なカトリックが主張する地獄観、悪魔観とは正反対の主張をした理論家がもう一人、ボードレールの同時代にいた。ボードレールが、『哀れなベルギイ』の中に、

アラン・カルデック。
「心情と頭脳をともに満足させる宗教」（２３）

と書いている、アラン・カルデックその人である。カルデックは１８５７年に主著のうちの一冊である『霊の書』を出版しているので、ボードレールがこれを読んでいる可能性は充分にある。

ここでは、カトリックに対する体系的な批判が展開されている『天国と地獄』（１

８６５年）から、長い論証の部分は割愛し、地獄と悪魔に関する結論だけを引用しておこう。まず、地獄に関して、アラン・カルデックは次のように言っている。

キリスト教が教える死後の生の様子は、残念ながら、魅力的なものでも、人を慰めるものでもない。
地獄に落ちた人々は、一瞬の過ちを犯しただけなのに永遠の業火に焼かれて、本当に辛そうに身をよじっている。何世紀も何世紀も、一切の希望もなく、火に焼かれ続けなければならないのである。しかも、さらに恐ろしいのは、彼らがいくら改悛したところで、そんなことはまったく考慮されない点である。（２４）

ついで、アラン・カルデックは、「死後の生の基礎をなす法律」の第二九条と第三〇条で次のように述べている。

第二九条　神の慈悲は無限である。だが、それは一方で極めて厳格でもある。神が罪人を許すということは、罪を免除するということではない。罪人がその罪を償わない限り、彼は過ちの帰結を引き受けざるを得ない。神の慈悲が無限であるとは、神が、善に戻ろうとする罪人に対して常に扉を開いて待っていて下さる、という意味であり、本当に悔い改めた者は必ず許して下さる、という意味なのである。
第三〇条　罰は一時的なものであり、自由意志に基づく悔悟と償いによって解消されるが、それは罰であると同時に、また悪を犯すことによって傷ついた心を癒すための治療でもある。したがって、罰を受けている霊は、徒刑に課せられた罪人というよりも、むしろ病院に収容されている病人と見るべきなのである。（２５）

確かに、神の慈悲が無限であるならば、地獄に落ちた魂を永遠に罰し続ける、というのは不自然なことであろう。ここでカルデックが主張しているように、自由意志に基づいてみずから悔悟と償いを果たした魂、本当に悔改めた魂は、必ず救われる、と考えるのが妥当であると思われる。
では、悪魔に関してはどうだろうか？　アラン・カルデックは次のように言っている。

教会の教義によれば、悪魔はもと善き存在として創られたのだが、不服従によって悪しき存在となった、とされる。つまり悪魔とは堕天使のことである。彼らは神によって存在の階梯の上部に置かれたのだが、そこから下へと下ったのである。（カルデックの主張である）霊実在論によれば、悪魔とは、不完全な霊であって、向上の余地を残している。彼らは階梯の下部にいるが、そこから上へと昇って行くことは可能なのである。
無頓着、怠慢、頑固そして悪しき意志によって霊界の下部にいる者たちは、そのことによって苦しみを得ている。だが、悪をなす習慣があるために、そこから出ることは難しい。だが、やがてそうした苦痛に満ちた生き方がいやになる時が来る。その時になって、彼らはみずからの生き方を善霊の生き方と比較し、本当は自分も

良き生き方をしたかったのだ、と悟る。そして、向上の道へと入るのだが、それもみずからの意志によってそうするのであって、誰かに強制されてそうするのではない。彼らは、もともと進化すべく創られているために、進化を目指すのであって、みずからの意志に反し、強制されて進化するのではない。神は常に進化の手段を彼らに提供しているが、それを使うかどうかは彼らの自由に任されている。もし進化が押し付けられたものだとしたら、何の手柄にもならない。神は、彼ら自身の努力によって手柄を立てることを望んでいるのである。神は、ある者たちだけを特別に選んで最上階に置くことはしない。それは誰に対しても開かれているのである。ただし、努力なしにそこに到達することはできない。（２６）

アラン・カルデックの主張によれば、地獄も悪魔も固定した存在ではなく、流動的な存在であるということになる。したがって、地獄に落ちたものは永劫にわたって地獄の火に焼かれ続けるわけではなく、また悪魔も未来永劫にわたって悪魔であり続けるわけではない。

地獄に落ちた者も、悪魔も、みずからの自由意志によって悔改めることにより、ともに救われる存在である、ということなのである。地上においては、悔改めることによって我々は救われる、それならば、地獄においても、悔改めることによって救われるのが当然ではないか、というのがアラン・カルデックの主張なのである。

そもそも宗教とは、人々に希望を与え、人々を幸福にするものではないのだろうか？

ところが、地獄と悪魔に関する、伝統的なカトリックの教義を信じると、その人間は希望を失い、不幸にならざるをえないのである。これはいったいどういうことなのだろうか？

ボードレールのように考えるよりも、ジョルジュ・サンドやアラン・カルデックのように考えたほうが、我々ははるかに大きな希望を持って、確実に幸福になることができるだろう。

ボードレールは、「赤裸の心　１７」において、ジョルジュ・サンドを猛烈に罵倒しつつ次のように言っている。

ジョルジュ・サンドを見るがよい。彼女はなんといっても、とりわけ大馬鹿者だ。しかも彼女は悪魔に憑かれている。彼女が自分の善心と良識を鼻にかけるようにしむけたのは、悪魔だ。それはすべての他の大馬鹿者がひとしく自分の善心と良識を鼻にかけるように彼女をして説かせるためだ。

私はこの愚かな女のことを考えると嫌悪で身ぶるいする。もしも彼女にでくわしたら、頭に聖水盤を投げつけずにはいられまい。（２７）

身ぶるいするほど他者を嫌悪し、罵詈雑言を浴びせる人間とは、果たして天国的だと言えるであろうか？

ボードレールは、人間は本質的に邪悪であると考えている。したがって、「善良な人間」とは、自分を正しく見ることのできない人間であるか、または単なる「偽善者」であるということになる。

なぜ人間を本質的に邪悪であると考えるのか？　それは、カトリックの教義の中心である「原罪」を信じているからである。
そこで、次に、この「原罪」について考えてみようと思う。

（３）原罪

ボードレールは、ジョゼフ・ド・メーストルと同様、原罪を固く信じていた。原罪があるために、人間は生まれながらにして本質的に邪悪である、とボードレールは考える。ゆえに、「E・ポオについての新しい覚書」の中で、ボードレールは次のように主張している。

> うぬぼれきった時代のうみの子であり、いかなる国民よりもうぬぼれのつよい国民の子であるこの作家が、人間の天性にともなう邪悪性をはっきりとみてとっており、はばかるところなく確言したということを注意しよう。（中略）この原始的で抵抗しようのない力は、天性の「邪悪性」であって、それが人間をたえずまた同時に殺人者と自殺者、暗殺者と死刑執行人に仕立てるのである。（中略）私は、わすれられていた偉大な真実である人間の本質的邪悪性ということだけをかんがえに入れたいと思う。（中略）「私は生まれついての善人だ、そして君たちも、またぼくたちみんなも、われわれは生まれつき善人なのだ」とくりかえしているあの人間性へのおべっかつかいたち、甘やかしども、うそつき屋たちすべての真向に、むかしながらの真理の爆発がこのような形でおこったのはきもちのいいことである。彼ら見当ちがいの平等論者たちは、われわれがすべて悪に向くように生まれついていることをわすれている、いや！　わすれたふりをしているのである。（２８）

ゆえに、「旅」という詩編において、

> 僕達は至るところに見た、見たがったわけでもないのに、
> 宿命の梯子の上から下まで鈴なりに、
> 永劫尽きせぬ罪業の、かの退屈な光景を。（２９）

と歌うわけであるし、「赤裸の心　４４」においては次のように断定するのである。

> どの日のでも、どの月のでも、どの年のでも、なんらかの新聞に眼をはしらせて、各行に人間の最も怖るべき頽廃の徴候、および、清廉、善意、慈悲に関するきわめて驚くべき高慢と、進歩と文明に関するきわめて図々しい肯定とに出会わないということはない。
> すべての新聞は、その最初の一行から最後の一行まで、嫌悪すべき事柄で織られている。戦争、犯罪、盗み、淫行、拷問、君主の罪悪、諸国民の罪悪、いたるところ兇悪の陶酔である。
> そしてこれが、文明人が毎朝食事に副える忌まわしい食前酒なのである。この世

のすべてが罪悪の汗をかいている、新聞も壁も人の顔も。
清らかな手がどうして嫌悪の痙攣なしに新聞に触れうるのか、私にはわからない。（３０）

これはまた、なんというペシミスティックな見方であろうか。
このように、ボードレールは、あらゆる「罪業」、あらゆる「頽廃」、あらゆる「罪悪」は「原罪」にその原因がある、と考えるのである。
ボードレールは、また、人間は原罪によって自然状態に陥ったがゆえに悪である、したがって「自然」は「悪」である、と考える。
一方、キリスト教的「霊肉二元論」の立場から、精神は善であり、肉体は悪である、とも考える。
その結果、自然に属する肉体は悪であり、自然的な存在である女性は悪である、という例の有名な断章（「赤裸の心　３」）が誕生することになる。

女はダンディの逆である。
だから、ひとをぞっとさせることになる。
女は腹がへると食べたがる。のどが渇くと飲みたがる。さかりがつくと、されたがる。
たいしたものだ。
女は自然的である、つまり忌まわしい。
また女はつねに卑俗である、つまりダンディの逆だ。（３１）

以上のように考える以上、女性との恋愛は「罪悪」である他ないということになる。だからこそ、「火箭　３」にある次のような主張も出てくるのである。

私は言う、恋愛の唯一至高の悦楽は、悪をなすという確信にある、と。――そして男も女も、悪の中にこそ一切の悦楽があることを生まれながら知っているのだ。（３２）

恋愛は、精神的な側面と肉体的な側面をかならず伴っている。肉体的な側面を欠いた恋愛などありえないのである。したがって、恋愛の肉体的な側面を「悪」と見なす限り、いかなる恋愛もかならず挫折に行き着かざるを得ないだろう。
これこそが、ボードレールとサバチエ夫人との悲劇の原因なのである。ボードレールは恋愛を罪悪と見なしつつ、あらがいがたく女性に引かれ続けた。ここに、ボードレールの陥った悪循環があった。
「原罪の教義」を信じることによって、ボードレールはこのように必然的に不幸な状態に陥っていったのだが、そもそも人を必然的に不幸にする宗教の教義などというものは、それ自体、矛盾した存在なのではないのか。
ここで、「原罪の教義」について、ごく素朴な疑問をあげておく。
まず、そもそも、「神に似せて造られたアダム」がなぜあれほど簡単に蛇（＝悪魔）の誘惑に屈したのか、その理由がわからない。

それに、人間が「神に近づこうとする」ことをなぜ神が嫌ったのかもわからない。むしろ、自分が造った人間が自分に近づこうとしたら、神はそれを慈しみの目で見るのが当然ではないのか。

また、カトリックの伝統的な教義によれば、「原罪」は「遺伝」することになっているが、これほど不自然な考え方もないのではないか。もし、それが事実だとするならば、「人殺し」から生まれた子供は「遺伝」によってかならず「人殺し」になる、ということになるだろう。しかし、それは、我々の経験則からいって事実ではない。

さらに、パウロの神学によれば、原罪を犯した人間は、キリストを信じることによって、そしてそのことによってのみ救われることになっている。しかし、だとしたら、キリストよりも前に生まれた人間は、絶対に救われないことになる。これはおかしいのではないだろうか？

このように、ボードレールが信じた「原罪の教義」には不自然なところが数多くある。そのような教義を信じて、必然的に不幸になるとしたら、その教義自体の正当性を疑わなければならないだろう。

既に述べたように、必然的に人間を不幸にするような考え方は、宗教の教義としてはおかしいと言わざるを得ないのである。

（４）祈り

ボードレールは、その早すぎる晩年において、実にしばしば神に祈るようになる。そして、その祈りはまことに真摯でありまた切実であった。散文詩１０の「午前一時に」に書かれた次のような祈りの真摯さを疑うことは誰にもできないであろう。

> 今や夜の静寂と孤独との中にあって、僕は自らを償い、多少の誇りを取り戻したいと願う。僕がむかし愛した人々の魂よ、僕が嘗て歌った人々の魂よ、僕を強くし、僕の弱さを支え、世の一切の腐敗した臭気と虚偽とを僕から遠ざけてほしい。そして爾（なんじ）、我が神よ、僕が人間のうちの最も末なるものでなく、僕の卑（いや）しむ人たちよりも尚劣った者でないことを自らに証（あかし）するために、せめて数行の美しい詩句を生み出せるよう、願わくは慈悲を垂れ給え。（３３）

あるいは、「火箭　２１」に書かれた次の祈りの切実さを疑うことは何人たりともできないだろう。

> 私は今後、生活の永遠の規則として、次の規則に従うことを自らに誓う。
> 毎朝、あらゆる力、あらゆる正義の源泉たる神に、また、仲介者として、私の父に、マリエットに、及びポオに、祈りを捧げること。彼らにたいし、私のすべての義務を果すに必要な力を与えられんことを祈ること。私の母に、私の改心を知って悦ぶに十分なだけの長命が与えられるように祈ること。一日中仕事をするこ

と、あるいは少なくとも、私の力のゆるすかぎり仕事をすること。私の計画が成就するよう、神に、すなわち「正義」そのものに信頼すること。毎晩新たなる祈りを捧げ、私の母と私に生命と力を与えられんことを神に願うこと。（３４）

さらに、「火箭　６」に見られる次の祈りの真摯さと切実さを疑うことは不可能だろう。

今こそきびしい生活の悦びを知れ、そして祈れ、絶えず祈れ。祈りこそ力の貯蔵所である。（意志の祭壇。精神の力学。秘蹟の魔法。魂の衛生。）（３５）

ここに見られる「精神の力学」「秘蹟の魔法」という言葉からもわかるように、ボードレールは祈りを心の底から信じていた。そのことは、「火箭　１１」に見られる次の一節からもわかるだろう。

祈禱には魔法的な働きがある。祈禱は知的力学の大きな力の一つである。そこには電気の回流に似たものがある。（３６）

すなわち、ボードレールは、祈りを一種の「力学」と見なしているのである。「電気の回流」のように物理法則のもとに働く、と考えているわけである。そのことは、「赤裸の心　４５」に見られる次の一節からも明らかだろう。

「祈り」について、「信仰」について。
イエスの精神力学。
（ルナンは、イエスが、「祈り」と「信仰」が物質的な意味でも全能だと信じたのを滑稽なことと考えている）。

秘蹟はこの力学の手段である。（３７）

ボードレールは、イエスが、「祈り」と「信仰」を物理的な意味でも全能だと信じたことを肯定しているのである。
ボードレールはさらに「火箭　２０」の中で次のようにも言っている。

夜にお祈りをする人は、見張りを立たせている隊長のごときものである。彼は眠ることができる。（３８）

ボードレールは、このように祈りを全面的に信じていたのだが、しかしそこには驚くべき逆説があると言わなければならない。というのも、祈りを捧げるべき対象が「誰」なのかわからない、と告白しているからである。１８６１年２月（あるいは３月）の母宛ての書簡で、彼は次のように書いている。

この恐ろしい精神状態、無力と気鬱症の中にあって、自殺の考えがもどってきま

した。今ではそれは去ったと言うことができます。一日のどんな時間にも、この考えが僕を責め悩ましていたのです。僕はそこに、絶対的な解放、万事からの解放を見ていた。同時に、それも三ヶ月の間、奇妙な、しかし外見だけの矛盾から、僕はいつ何時となく祈りました（誰にか、どんな一定の存在にか、そんなことは全然知らないが）（３９）

あらゆる「矛盾」を一身に背負っていたボードレールは、神との関係においても解きがたい「矛盾」を背負い込んでいたのである。同年５月６日の母宛ての書簡では、次のようにも言っている。

僕はほんとうに心から（どれほど誠実な心をもってであるか、僕以外の誰も知ることはできない！）、目に見えない、自分の外のある存在が、自分に関心を寄せていてくれると信じたいのです。しかしそれを信ずるには、どうしたらよいのだろう。（４０）

まさに瀬倉正克氏も指摘するように、「ボードレールの宗教性の本質は、信じつつ疑い、疑いつつ信じるという、その動的なうちにこそ」（４１）あったのである。あるいは、齋藤磯雄が、シャルル・デュ・ボスの主張を踏まえて指摘するように、「ボオドレエルは、『信仰承認』ということに、あらかじめ極めて峻厳な、殆ど超人間的な諸条件を課するが故に、信仰が既に魂に宿っている場合にさえ、自分は信じていると思い込むのに最も困難を覚える種類の人」（４２）だったのである。

ボードレールは、ある意味では、あまりにも「誠実」でありすぎたのかもしれない。通常の人であれば、「自分は神を信じている」と思うことのできた状況において、彼の場合、あまりにも苛烈で峻厳な良心のゆえに、「自分は神を信じている」と思うことができなかったのであろう。

しかし、それはこの詩人に悲劇をもたらした。神の存在を確信することができないゆえに、ボードレールは、次のような「計算」をする他なかったのである。

神に都合のよい計算。
なにものも目的なしに存在しない。
だから私の存在は目的を持つ。（４３）

しかし、これは、あくまでも「賭け」に勝つために「神に都合のよい計算」をしたにすぎない。したがって、「私の存在は目的を持つ」にしても、それが「如何なる目的か。私は知らない。」と、さらに続けて書かざるを得なかったのである。

すなわち、ボードレールは、神との関係において自分の存在の本当の目的を見つけ出すことがついにできなかった。その結果、ボードレールは、一生のあいだ、例の「A quoi bon!」（「それが何になる！」）という不吉な鐘の音（ね）につきまとわれることになるのである。何をやっても空しい、何をやっても「これでよし！」と思うことができな

い。ボードレールがあれほど深刻な「倦怠」に襲われ続けたもっとも根本的な原因は、まさにここにあったと言えよう。

真摯に、誠実に祈りつつ、ついにその祈りの対象を見いだすことができない。ここにこそボードレールの「祈り」の悲劇性があった。

（５）進歩

ボードレールが生きた１９世紀は、近代科学が生まれ、そして成立した時代だった。人々は物質面での進歩こそが「進歩」であると思い込み、機械文明を無邪気に信奉し始めていた。しかし、そんな中で、ボードレールは、安易な物質主義に対して警鐘を鳴らし、物質の優位に対して精神の優位を強く主張し続けたのである。

物質面での進歩に対する警鐘を、ボードレールはたとえば次のように鳴らしている。

> 機械の発達はわれわれをアメリカ化し、進歩はわれわれのうちにある精神的部分をすっかり萎縮させてしまうだろう。（４４）

あるいは、また、物質面での進歩を我々の優位のしるしとする見方を断罪して、次のように言う。

> カフェで自分の新聞を毎日読む良きフランス人の誰にでも、彼が進歩というとき何を意味するのか尋ねて見たまえ。彼は、それは、ローマ人たちの知らなかった数々の奇蹟、蒸気機関、電気、ガス灯であり、これらの発明発見が、私たちの古代人への優越を証明して余りあるものだと答えるだろう。それほどまでに、この不幸な頭脳の中には暗闇がみなぎってしまい、そこでは、物質界に属する事物と精神界に属する事物とが、かくも奇妙なぐあいに混同してしまっているのである。（４５）

物質界と精神界を截然と分け、断固として精神界の優位を説いたのがボードレールであった。その意味では、やはり、ボードレールは著しく宗教的な人間であったと言えるだろう。ボードレールの眼差しは、絶えず、物質面にではなく、精神面に注がれていたからである。ボードレールにとって、物質面における「進歩」は進歩と呼びうるものではなく、精神面での「進歩」こそが真の意味での進歩と呼びうるものであった。

そして、精神面での進歩がありうるとすれば、それは我々の一人ひとりが進歩しようと思わなければならないのである。安易な「進歩への信仰は怠け者の教義」（４６）に他ならない。

> 進歩（真の進歩、すなわち精神上の進歩）は、個人のうちにしか、かつ個人自身によってしかありえない。（４７）

> 進歩の法則が存在するためには、各自がそれを創ることを望んでいなくてはなら

ない。すなわち、すべての個人が進歩することに専心するとき、そのときにのみ、人類は進歩するだろう。（４８）

ここには恐るべき真実が語られている。ある意味では、究極の宗教的真理とでもいうべきものかもしれない。

「進歩」に対するこのボードレールの洞察は、１９世紀という時代のみならず、物質的進歩が極限にまで到達しつつある現代をも、その冷徹な光で照らし出しているのである。まさに詩人の炯眼恐るべし、と言えるだろう。

III　伝統的カトリックから逸脱する側面

すでに述べたように、ボードレールは神と悪魔を信じ、原罪の教義を信じ、また天国と地獄を信じていた。したがって、基本的にはきわめてカトリック的な詩人だったのである。

しかし、また、カトリックの教義には収まりきらない側面をいくつも持っていたこともまた事実である。そこで、以下に、そのような側面について論じることにする、

（１）自殺

当然のことであるが、カトリックにおいて自殺は禁じられている。しかるに、ボードレールは、２４歳の時に自殺を試みている。１８４５年6月３０日の母宛て書簡に、その経緯が詳しく語られているので、その一節を引用してみよう。

> 私は自分を殺します——心痛なく。（中略）私はもうこれ以上生きることができず、眠りにつくことの疲労と目覚めることの疲労が私にとって耐え難いゆえに、自分を殺します。私は他人たちにとって無用であり——かつ自分自身に対して危険であるゆえに、自分を殺します。私は自らを不死であると信じるゆえに、私は希望を持つゆえに、自らを殺します。（４９）

また、これはすでに引用したのだが、３９歳の時にも母親宛ての書簡の中で自殺に触れている。

> この恐ろしい精神状態、無力と気鬱症の中にあって、自殺の考えがもどってきました。今ではそれは去ったと言うことができます。一日のどんな時間にも、この考えが僕を責め悩ましていたのです。僕はそこに、絶対的な解放、万事からの解放を見ていた。（５０）

さらに「E・ポオ、その生涯と作品」においては、「ある種のドグマや輪廻説へのしっかりした信念をもっているならば」と断った上でのことだが、「誇張でも冗談でも

なく、自殺はしばしば人生の最も道理にかなった行為である」(５１)、と断定している。さらに、「火箭　１５」には、次のような極端な言説さえ見られるのである。

> ストイシスム、一つの秘蹟しかもたぬ宗教――その秘蹟とはすなわち自殺！（５２）

（２）輪廻

ボードレールはまた、カトリックからすれば当然異端である「輪廻説」への親近感を持っていた。そのことは、「ヴィクトル・ユゴー」に見られる次の一説からも明らかである。

> 聖書の中には、預言者が神によって一冊の書物を食べるように命ぜられるという話がある。私はヴィクトル・ユゴーが、この世で語るように定められた言葉の辞典をどこの世であらかじめ食べてきたのかは知らない。だが私の見たところでは、フランス語の語彙は、ユゴーの口から出ると、豊かな色彩と美しい旋律に満ちた、躍動する世界となり宇宙となっている。(５３)

ここで、ボードレールは、この世以外の世があって、ユゴーはそこで、この世で語るように定められた言葉の辞典をあらかじめ食べてきた、という可能性を示唆している。だからこそ、ひとたびフランス語がユゴーの口から出ると、それは、豊かな色彩と旋律に満ちた、躍動する世界と宇宙をかたちづくったのだ、と主張しているわけである。

また、先ほど引用した一節、「ある種のドグマや輪廻説へのしっかりした信念をもっているならば」を見れば、ボードレールが「輪廻説」の可能性を充分に認めていたことがわかるだろう。

また『悪の華』の「先の世」と題された詩の原題は、La Vie Antérieure であって、これはまさしく「前世」のことである。ボードレールは、この詩において、「前世」についての記憶を歌っていると考えられる。

１２　先の世

> 僕は長く長く暮らした、広々とした柱廊のもとに、
> そこ――海の太陽が幾千の火に色を染め、
> すくすくと戦士のように立ち並ぶ柱のため、
> 夕べ、さながら玄武岩の洞窟とも見えるところに。
>
> 波は大空の風景を波間(なみま)に展(ひろ)げ、また
> 豊かな海の音楽の全能の弦(げん)の調べと

僕の瞳に映る夕ばえの色のうたげと、
おごそかに、神秘に、たくみの業（わざ）に混じり合せた。

そこにこそ僕は生きた、静かな悦楽に包まれて、
蒼空と、きらめく波と、輝かしい壮麗とのただ中に、
香（こう）を塗り込めた裸形（らぎょう）の奴隷たちに囲まれて、

僕の熱した頭を扇ぐ棕櫚の葉風はゆるやかに、
僕の胸をやるせなく悩ませた苦しい秘密を
更に深めることばかりが、彼等の仕事ででもあったろう。（５４）

ボードレールは、また、この先の（４）において触れることになるヘルメス文書からも「輪廻説」を学んでいる。ヘルメス思想においては、人間は輪廻を繰り返したあげくに、ついに「神」となり、天上界に生きることができるようになる、とされている。

ポール・アルノルドによれば、『悪の華』「１２６　旅」の最終節において、詩人が、神の恩寵を請うことなく、あれほど陽気に、あるいはあれほどの諦観をもって死の中に飛び込むことができたのは、ボードレールが「輪廻」を確信していたからである、ということになる。（５５）

おお「死」、年老いた船長よ、今こそは時だ、錨（いかり）を巻こう！
この国に僕等は既に飽きた。おお「死」よ、船を駆ろう！
たとえ空と海がインキのように黒いとしても、
お前の熟知する僕等の心は光明の中に充たされよう！

僕たちに力をつけるため、お前の毒をそそげ！
この焔は僕等の脳漿（のうしょう）を焼く。地獄でも天国でも、
願わくは深淵のふところ深く僕等は身を沈めよう、
未知の奥底に、**新なるもの**を探るために！（５６）

（３）魔術・魔法

詩というのは、「言語の魔術」によって「そこにない世界をそこにあらしめる」アートである、と言うことができるだろう。その意味において、ボードレールはまさに卓絶した「言語の魔術」の使い手であり、ボードレールの詩が持つ「喚起力」にはまことにすさまじいものがある。そうしたボードレールの芸術の特色を齋藤磯雄は次のように評している。

実に、客観と主観、抽象と具象、普遍と特殊を、魔法のごとく統一し、融合することこそ、ボオドレエルの芸術に於る最大の驚異である。（５７）

ボードレール自身もまたそうした「言語の魔術」についてたびたび言及している。たとえば、「ヴィクトル・ユゴー」の中で、「真の詩人」に関して次のように述べている。

一切を描く能力をもたぬ者、宮殿もあばや屋も、愛情も残酷さも、仮定の内輪な愛情も人類愛も、植物の美しさも建築の驚異も、この世にある最も優美なものも最も恐ろしいものも、いろいろな宗教がもっている内面的な意味も外面的な美も、いろいろな国民の精神的な容貌も肉体的な容貌も、要するに、目に見えるものから見えないものにいたるまで、また天国から地獄にいたるまでの一切を描く能力をもたぬ者、そうした者は、私に言わせれば、どんなに詩人の意味を広げたところで、神の心にかなった真の詩人とは呼びえないのである。（５８）

また、「テオフィル・ゴーチエ（一八五九）」の中では、次のように言っている。

一つの言語を巧みにあやつることは、一種の神降しの妖術を行うことである。その時、色彩は殷々と響き渡る声のごとく語りかけ、大建築物ははそびえ立って、深い空間の上に突出し、醜と悪の代表者である動物と植物ははっきりとした渋面を作り、香りはそれに照応する思考と思い出を呼び起し、情熱はその永遠に同じ言葉をささやいたり、うめき立てたりする。（５９）

このように、芸術としての詩を語るに際して「言語の魔術」に言及する場合には問題がないが、次のように、霊的な作用を伴う「魔法」や「魔術」、さらに「魔除け」について語る時、ボードレールは明らかにカトリックから逸脱し、「異端」の相貌を帯び始めると言えるだろう。

偉大な死者を呼び起こすのに用いられ、また健康の回復ならびに増進のために用いられる魔法について。
（中略）
霊を呼び降ろす魔法、魔術、としての言葉ならびに文字について。（６０）

哲学によって証明される護符の力。穴をうがった銭、魔除け、各人の思い出の品。（６１）

（４）ヘルメス

ここで、すでに引用した一節も含めて、『悪の華』の冒頭を飾る「読者に」の最初の四節を見てみよう。

愚行、あやまち、罪、吝嗇に、
心は充たされ、身はさいなまれ、
その上お気に入りの悔恨まで養う僕等、
乞食どもが大事に虱を育てるように。

僕らの罪科（つみとが）は執念深く、後悔の方は醒め易く、
懺悔（ざんげ）はしても埋合わせはたっぷり受け取り、
一切の穢れも賤しい涙で洗い流せばそれまで、
鼻歌まじり、また泥道に舞い戻る。

悪の枕に陣取るは、「大悪魔トリスメジスト」、
魅了された僕等の心をいつまでも睡りに揺（ゆ）すり、
また僕等が意志と名づける貴金属も、
玄妙のこの化学者の手にかかればすべて蒸発。

僕らを動かす糸を引くもの、これこそ「悪魔」！
怖気をふるう品々にあやしい魅力を見つけ出す、
毎日僕等は堕ちて行く、「地獄」の方へ片足ずつ、
恐れも知らず、悪臭放つ暗黒の闇を渡って。（６２）

第三節には、「大悪魔トリスメジスト」という言葉が見られるが、これは「ヘルメス・トリスメジスト」すなわち「ヘルメス・トリスメギストス」のもじりである。

ところで、中堀浩和氏は『ボードレール　―魂の原風景』の中で次のように言っている。

> トリスメギストスはギリシャ語で「三倍も偉大な、非常に偉大な」を意味する形容詞であり、普通はギリシャ神話の神ヘルメスにつけられる。Hermès はエジプトの神トート Thoth、ローマの神メルクリウス Mercure と同一視される。ヘルメス・トリスメギストスはエジプト人があらゆる学芸の創始者と見做した月の神トートにギリシャ人が付けた名前。ギリシャ人はこの神をエジプトの大昔の王で、伝承によって、魔術や、占星術や錬金術に関する多くの秘密の書の作者とした。（６３）

つまり、「大悪魔トリスメジスト」というのは、「三倍も偉大な、非常に偉大な悪魔」ということで、恐らく悪魔のトップであるルシフェルを指すのであろう。鉛を金に変える錬金術ではなく、金を鉛に変えてしまう負の錬金術を駆使する大悪魔は、その錬金術によって我々人間の貴重な意志を雲散霧消させ、倦怠という恐るべき地獄に我々を突き落とすのである。

「読者に」という詩において、そうした大悪魔の活躍ぶりが、本来はヘルメスにつく「トリスメギストス」という形容詞によって見事に表現されていると言えるだろう。

ところで、負の錬金術師としての悪魔は、「苦悩の錬金術」という詩にも登場する。

僕を助けてくれた、人の知らないヘルメスよ、
しかもいつでも僕に気おくれさせたお前は
かのミダス王に僕を等しくする、
錬金術師のうち最も悲しめる者に。

お前によって僕は黄金を鉄に変え、
また天上の楽園を地獄に変える。
僕は、雲の織りなす 経帷子（きょうかたびら） に
親しいひとの 屍（かばね） を見いだし、
天の岸辺の彼方にあって
大きな石の 棺（ひつぎ） をつくりあげる。（６４）

ここで「人の知らないヘルメスよ」Hermès inconnu とは「これまで見たこともないヘルメス」、すなわちヘルメスにも等しい力を備えた「大悪魔」を指すと考えられる。つまり、「読者に」という詩に登場した「大悪魔トリスメギストス」のことなのである。この「負の大錬金術師」のせいで、詩人は、触るものをすべて黄金に変えたミダス王とは逆に、「黄金を鉄に変え、また天上の楽園を地獄に変え」てしまうわけである。かくして、「錬金術師」のうちで「最も悲しめる者」となる。

このように、ボードレールは、ヘルメスのイメージを『悪の華』の背後に潜ませることによって、単なるカトリック的な詩集ではない、重層的なシンクレティズムの詩集にしていると言えよう。

ところで、ポール・アルノルドの『ボードレールの秘教』によれば、ボードレールがヘルメスについて詳しく学んだのは、１９歳のころに、友人のルイ・メナールからヘルメス文書のうちの重要な一冊である『ポイマンドレース』を紹介されてからである、ということになる。ボードレールはギリシャ語で『ポイマンドレース』を読んだ可能性が高い。さらに、ヘルメス文書の別の一冊『アスクレピオス』をラテン語で読んだ可能性があるという。（６５）

（５）グノーシス

「火箭」や「赤裸の心」の中には、明らかにカトリックから逸脱していると思われる断片がかなり見られる。たとえば、「赤裸の心２０」に見られる次の断片がそうであろう。

神学。
堕落とはなにか。
一元が二元になったのが堕落ならば、堕落したのは神である。

言葉をかえていえば、創造は神の堕落ではないだろうか。（６６）

これはカトリック神学から見ればまさに「神の冒涜」に他ならず、「異端」の烙印を押されかねない考え方である。
では、ボードレールは、こうした考え方をどこから得たのであろうか？
一元的世界から二元的世界への「落下」「失墜」「堕落」というテーマは、『悪の華』の「８４　救いがたいもの」という詩にも見られる。

一つの「思想」、一つの「形」、一つの「存在」、
蒼空に生まれそこから堕ち、「天国」の
如何なる眼にも見抜き得ない
泥まじりの鉛色の「地獄の河」に溺れたもの。（６７）

そして、この詩に関する注釈の中でマックス・ミルネは次のように言っている。

この一節は、悪と物質の起源に関するグノーシス主義者たちの考え方と関わっている。すなわち、グノーシス主義者たちによれば、悪と物質は、一なる存在である神の、多元への失墜ないしは堕落から生じたのである。（６８）

一方、ポール・アルノルドは『ボードレールの秘教』の中で次のように主張する。

ボードレールは、異教的な概念あるいはグノーシス的な概念を、現代的でキリスト教的な言語、語彙、イメージによって言い表そうとした。（６９）

また、大貫隆氏は、『ナグ・ハマディ文書Ⅰ　救済神話』の「グノーシス主義救済神話の類型区分」の中で、ある文書が「グノーシス主義的」と呼ばれ得るための５つの必要条件をあげているが、その最初の３つは見事にボードレールの主張と重なる（もちろん、ここでは、ボードレールの文書が歴史的に見て厳密に「グノーシス主義的」な文献であるかどうかを判断しようとしているわけではなく、一元であった神の「堕落」「落下」という問題に関して、ボードレールがグノーシス主義的な世界観から影響を受けているかどうかを問題にしているにすぎない）。その３つの条件をここにあげてみよう。

１）人間の知力をもってしては把握できない至高神と現実の可視的・物質的世界との間には越え難い断絶が生じている。
２）人間の「霊」あるいは「魂」、すなわち「本来的自己」は元来その至高神と同質である。
３）しかし、その「本来的自己」はこの可視的・物質的世界の中に「落下」し、そこに捕縛されて、本来の在り処を忘却してしまっている。（７０）

以上のことを考え合わせることにより、上にあげたボードレールの断片は、「一元

なる神からの二元的世界への失墜」というグノーシス主義的な世界観を表明したものだと考えて差し支えないだろう。

（６）その他

以上のほかに、ボードレールの生き方の中でカトリックから逸脱した要素としては、「ダンディスムにおける自我崇拝」がある。これは、従順、謙虚、無私を旨とするカトリックからはるか遠くに逸脱した生き方であろう。
また、ボードレールははっきりと「多神教」を認めていたが、「多神教」はカトリックからすれば「邪教」に当たる。
さらに、ボードレールには「悪魔崇拝」の側面もあった。
また、ボードレールがスウェーデンボルグの思想に親しんでいたことも忘れてはならないだろう。ボードレールは、スウェーデンボルグから、天国と地獄に関して詳細に学び、また、「万物照応」の理論を学んだ。
このようにボードレール生涯には、カトリックを逸脱する数多くの要素が見られる。

IV　おわりに　―未来への希望―

以上見てきたように、ボードレールの宗教観は、とうていカトリックの世界観に収まりきるようなものではなかった。カトリックの立場からすればこれは認めがたいことであろうが、カトリックから遠い、シンクレティズムの世界に生きる極東の人間からすれば、むしろ、それは、未来への希望をはらむ非常に豊かな宗教観であると考えられる。
本論の冒頭で、「赤裸の心　３１」にある、

> 地上で興味あるものは宗教しかない。

という断片を引用したが、それに続けて、ボードレールは、次のように言っている。

> 普遍的宗教とはなにか。（シャトーブリアン、ド・メーストル、アレクサンドリヤ派、カペ[?]）。

ここで、注意すべきなのは、「興味あるもの」としての宗教が、les religions というように複数になっていることである。すなわち、ボードレールの関心は、西洋人にとっての la religion――すなわちキリスト教――のみにあったのではなく、あらゆる宗教に向かっていたのである。
また、「普遍的宗教」が、「普遍的宗教としてのカトリック」la religion catholique ではなく、「大文字で始まる普遍的宗教」La Religion Universelle となっていることにも注目する必要があるだろう。ボードレールは、苦悩のうちにありながらも、諸宗教を統合する宗教という意味での「普遍的宗教」を一生のあいだ探求し続けたのであ

る。
シャトーブリアン、ド・メーストル、そしてアレクサンドリヤ派に関しては、『ボードレール全集 II』の注に次のように書かれている（カペに関しては不明）。

> シャトーブリアン『キリスト教真髄』第一部第三の書第一章に、世界のあらゆる宗教に共通な普遍的真理の存在を説く一説がある。また、ジョゼフ・ド・メーストルの『供犠解明』中には、罪なき者の犠牲が罪人の罪を贖うとする思想が、キリスト教以前の偶像教にも供犠の儀式という形で存在したことをいう条りがある。（『赤裸の心』４を参照）。アレクサンドリヤ派とは、三世紀から五世紀のアレクサンドリヤで、古代宗教・諸哲学を綜合折衷してネオ・プラトニスムを築いた哲学者たちをいい、その代表的哲学者、プロチノス、ポルフュリオスの名は、「ラ・ファンファルロ」に見える。（７１）

キリスト教以前の偶像教（＝多神教）も視野に入れ、古代宗教・諸哲学を綜合して、あらゆる宗教に共通な普遍的真理を探究し、そして手に入れるという希望の道を、ボードレールは私たちのために開いてくれたと言えるだろう。
ボードレールは原罪説を固く信じる一方で、「真の文明」を確立するためには「原罪」を消さなければならないと考えていた。ボードレールが夢見た「真の文明」を、今後、我々人類は確立することができるであろうか？

> 真の文明の理論
> 真の文明は、ガスの中にも、蒸気の中にも、回転テーブルの中にもない。それは原罪の痕跡の減少のうちにある。（７２）

以上を全体としてまとめると、ボードレールが最終的に目指していたのは、すべての宗教が統一されて普遍的宗教が出現し、その中で人類の一人ひとりが真剣にみずからの進歩のために努力をし、その結果として原罪の痕跡が滅却された世界であった、ということになる。
ボードレールの人生は、貧困、苦悩、憎悪、呪詛、悪運に満ちた悲惨なものであったが、一方でまた、ささやかなものではあるが、そこかしこに未来の希望の芽を秘めていたのである。

注

＊　ボードレールからの引用は、福永武彦編集・人文書院刊の『ボードレール全集』全四巻から行なった。

＊　また、印刷の都合上、正字・正かなで書かれた論文を、新字・新かな表記に改めさせていただきました。記して筆者の寛恕を請います。

（１）『ボードレール全集 II』、p.56
（２）ibid., p.266
（３）ポール・ブールジェ『現代心理論集』、平岡昇、伊藤なお訳、法政大学出版、1987 年、p.26
（４）『ボードレール全集 II』、p.246
（５）ibid., p.247
（６）齋藤磯雄『ボオドレエル研究』、東京創元社、1971 年、p.162
（７）『ボードレール全集 I』、p.210
（８）ibid., p.115
（９）『ボードレール全集 II』、p.366
（１０）ibid., p.396
（１１）ibid., p.398
（１２）『ボードレール全集 I』、p.329
（１３）『ボードレール全集 II』、p.424
（１４）『ボードレール全集 I』、p.164~165
（１５）ibid., p.156
（１６）ibid., p.115~116
（１７）ibid., p.128
（１８）ibid., p.139
（１９）ibid., p.172~173
（２０）ibid., p.288~289
（２１）ibid., p.303~304
（２１）『ボードレール全集 II』、p.250
（２２）シャルル・ボードレール『火箭・赤裸の心』、齋藤磯雄訳、立風書房、1974 年、p.260~261
（２３）『ボードレール全集 III』、p.484
（２４）Allan Kardec, *Le Ciel et l'Enfer*, Editions Vermet, 1990, p.22
（２５）ibid., p.99
（２６）ibid., p.134-135
（２７）『ボードレール全集 II』、p.250~251
（２８）『ボードレール全集 III』、p.29~30
（２９）『ボードレール全集 I』、p.231
（３０）『ボードレール全集 II』、p.265~266
（３１）ibid., p.243
（３２）ibid., p.223
（３３）『ボードレール全集 I』、p.294

（３４）『ボードレール全集 II』、241
（３５）ibid., p.225
（３６）ibid., p.230
（３７）ibid., p.266
（３８）ibid., p.240
（３９）ibid., p.403
（４０）ibid., p.408
（４１）瀬倉正克「ボードレールの宗教性 I ――バルベー・ドールヴィイのボードレール評価」、明治大学人文科学研究所紀要、第三十六冊、1994 年、p.262
（４２）齋藤磯雄、op.cit., p.140
（４３）『ボードレール全集 II』、p.243
（４４）ibid., p.235
（４５）『ボードレール全集 III』、p.98
（４６）『ボードレール全集 II』、p.246
（４７）ibid., p.246
（４８）ibid., p.267
（４９）ibid., p.294
（５０）ibid., p.403
（５１）『ボードレール全集 III』、p.13
（５２）『ボードレール全集 II』、p.234
（５３）『ボードレール全集 III』、p.48
（５４）『ボードレール全集 I』、p.126
（５５）Paul Arnold, *Esotérisme de Baudelaire*, Librairie Philosophique J. Vrin, 1972, p.142
（５６）『ボードレール全集 I』、p.233
（５７）齋藤磯雄、op.cit., p.192
（５８）『ボードレール全集 III』、p.50
（５９）ibid., p.115~116
（６０）『ボードレール全集 II』、p.229
（６１）ibid., p.266
（６２）『ボードレール全集 I』、p.115
（６３）中堀浩和『ボードレール　――魂の原風景』、春風社、2001 年、p.125~126
（６４）『ボードレール全集 I』、p.174
（６５）Paul Arnold, op.cit., p.11-31
（６６）『ボードレール全集 II』、p.252
（６７）『ボードレール全集 I』、p.176
（６８）Baudelaire, *Les Fleurs du Mal*, texte présenté et commenté par Max Milner, Imprimerie nationale, 1978, p.396
（６９）Paul Arnold, op.cit., p.174-175
（７０）『ナグ・ハマディ文書 I　救済神話』、荒井献　大貫隆　小林稔　訳、岩波書店、1997 年、p.2-3
（７１）『ボードレール全集 II』、p.478
（７２）ibid., p.259